

# 健康教育

題字 薬学博士 河合龟太郎

## 本誌の主張

1. 教育の基調は健康にあり
2. 栄養に関する正しい知識を普及する
3. 食生活の改善により国民体位の向上をはかる



☆ 特集 座談会	学童と災害	2
訪問記	寿にして康	6
学校紹介	保健体育一如の姿	7

No 8



(座談会を終って)

原島 みな様のお許しを得まして、私がこの問題の進行係ということになりましたので、今晚ゆっくりとお話を伺わせていただきたいと思います。

最近厚生省が出しました統計を見ますと、32年の国民全体の重要な死亡原因の第1位が脳出血、第2位がガンとか肉腫、第3位が老衰、第4位が心臓の病気、第5位が肺炎、気管支であり、第6位が結核ということになるのですが、結核が第6位に落ちたということが32年度の新しい事象なのであります。

これについて第7位を占めているのが不慮の事故ということになります。国全体としての第7位ということは、だんだん重要な問題となって来るわけでありまして、後からお話が出ることでしょうが、交通が頻繁になってくるということに因るものでありましょう。ところがここで考えなければならないことは、重要な死因のうち第7位に不慮の事故があるばかりでなく、年齢別に考えてまいりますと、若い人殊に学童という特別な年齢階級の死の第一原因が何であるかということ、この不慮の事故なんです。

国全体としては第7番目になるのですが、学童期になりますと、死因の第1あるいは第2位になります。

例えば、男と女で違いはありますが、男について5歳から9歳までをとりますと、この時の死亡率の第1位をしめているのが不慮の事故なのであります。10歳から14歳も、また、15歳から19歳でも、第1位、そして、20歳から24歳になりますと結核の下になって第2位、25歳から29歳になると結核と同位またはそれよりも高い。

われわれは15歳以上を今日の課題から外していえば、この学童期、義務教育期間におる人たちの死因が災害にあるということは学校教育上においても、国民健康の上からも由々しい重大問題ではないかと思うのであります。今晚これからお話したいという趣旨はここにあるのであります。

なお、女の場合では男ほどではないことは想像されることですが、それでも以上の各年齢層において第2位の死因をなしています。

これらの統計は死亡率をとりあつかっているものであって、さらにその裏にはケガその他不具等が多々あるのであります

— 座談会 —

## 学童と災害

慶応大学教授 医博 原 島 進  
 出 文部省保健課事務官 医博 湯 浅 謹 而  
 席 東京都渋谷区猿樂小学校長 中西 祐 三 郎  
 東京都杉並区桃井第三小学校養護教諭  
 者 白 岩 け い  
 横浜市元街小学校保健主事 蒲 谷 清  
 (昭 33. 10. 22 本社会議室において)

て、これらの事実は氷山の一角に過ぎないと思われるのであります。

死はもちろん重大な問題であります、同時に不具が残るとか、ケガのために学業を休むとかも、はなはだ由々しい問題であります。このごろ特に文部省の保健課の方々がこの点を強調せられるようになりまして、私どももこれに関心を持たなければならぬことをしきりに感ずるようになった次第であります。

この辺をはしがきといたしまして、先生方の御経験あるいは御資料をお話しいただきたいと思うのであります。

それで中西先生一ついかがでしょうか。

中西 私港区本村小学校の校長をいたしておりました時に湯浅先生の御指導を得まして、健康教育ということを学校の大きなテーマとしてかかげてやりました。その時に湯浅先生は命を長くすることが健康の目的だといつでもお話になっておられたわけなんです。

健康教育としていろいろな面で御指導をいただいたのですが、その中でも事故死が一番高い死亡率であるということを確認いたしました、災害に対して安全であるように教育を進めて行きたいと考えたのであります。

ところが研究の手がかりがなくて苦しんでいました時に、労働省の産業安全研究所で、産業の安全ということを守るにはどうしたらよいかということ全力をあげて研究しているが、結局は小中学校の義務教育において安全ということを徹底的に教えておかなければ産業安全の確立ができないという結論を得た。それによってぜひ学校の安全教育ということを考えてもらいたいというお話が出たわけです。これと前にお話いたしましたことと合せ考えまして、安全教育に手をつけ始めて考えました結果、先ず一番の問題として

- 子供の環境を一番安全な環境におく
- 教授、指導している時に安全ということを考える
- 家庭における安全というもののしつけをどうしていくかということを取りあげ、それぞれの面で細かい案を立てていきつつあったわけなんです。

環境ということになりますと、校舎全体の問題、器物その他の問題がありますし、授業の面では、どういう風に安全に

関する学習を展開するかを考えております。それから家庭内の安全については父兄との協力によって家庭環境の安全、家庭生活の安全というようなことを考え、交通上の安全についてもいろいろ考えていくということをやってまいりました。話が長くなりましたが、事例についてはまた後で……

原島 ありがとうございます。

実際に小学校の事故の原因は何でしょうか。大きく別けて、交通もあり、家庭でのこともありましょうし、日本で有名な事実はこの年齢の人は、泳いでいる時の水死が多いこと、これなどは家庭に入れるか、学校に入れるか、スポーツに入れるかが問題になるわけですが、どの位の割合で起っているか、おしらべになったことがあるでしょうか。

中西 事例を先に申しませうか。私が猿樂小学校に赴任したばかりのことでしたが、四階のアパート生活をしていて一年生の子供が遊びの途中落ちて死にました。これは子供ばかりでなく日本における高層住宅生活の安全に対する注意が足りない。こういうことが私たちに課せられた安全教育の面ではないかということ、それから交通上の問題では一年入学と同時に先生なり上級生が交通上の規制を正しく教える。それから校舎の中では校舎の危険度を少なくするということですが、学校という共同生活の場では階段をできるだけ少なくすることもその一例として、その施設については管理者として考慮を払っていくべきではないかと考えているわけでありませう。

原島 このことについてどうぞ御自由にお話合っていたきたいのですが。

蒲谷 今の登校下校の交通の件ですが、横浜市の現状を申し上げますと危険な場所には生徒あるいは警官をお願いして整理してあるわけですが、登下校の時よりも遊んでいる時の事故が非常にふえています。

原島 それは交通事故ですね。

蒲谷 私の学校で最近あった例で交通事故で死亡した子供がありますが、やはり時間外に遊びに行った帰りに事故を起こしているのです。その事故もその子が交通規則を守らなかったことに原因があるんですから私共がそういうことに心を向けて指導すれば相当除去される問題なんです。

私の通勤途上にも非常に危険を感じる所があるんです。だから学校だけでなく親が子供を出すとき、また運転手の方々も交通の事故ということを考えていただきたいですね。

湯浅 ただ今ケガの原因について中西先生、蒲谷先生からお話がありました、全般的な話を少し申し上げてみたいと思うのであります。学童の不慮の事故の原因はおよそ五つに別けることができると私どもは考えているのであります。

その第一は最近愛知県統計で見ますと、子供が1週間中

どの日に一番ケガをするかということ、一番疲れがたまっている日ということになっています。

次に、中西先生がおっしゃったように子供たちが安全について、あるいはケガを予防するということについての知識を持たないために起ることがあります。その次ぎは何か心に悩みがある、それでついうっかりして安全を欠いて事件を起こす。それから第四番目に色盲や耳が聞えにくい、テンカンとかヘルニヤとかそういう欠陥で起るとき、最後に、よそからやってくるものに特別な注意を引かれて不安定な行動をしている時に事故が起ることなどであります。

で、一番問題になるのは、人間の側の五つの欠陥ともう一つ中西先生からお話がありました環境整備をしなければならない。中西先生が校長をしておられた本村小学校で、壁を塗り替えたトタンにケガが少なくなった。もう一つ学芸大附属小での実験で、壁を塗り替えたなら子供の行動に変化が起ったという例です。この二例は別々にやられたことですが一致している。従って環境を整備してやる、子供たちのからだを丈夫にしてやる、そしてその知識を持たせるということになるのではないかと思ってるわけなんです。その他白岩先生の方から何か追加がありましたらお願いしたいんですが……

白岩 湯浅先生のお話で十分だと思いますが、私共日常生活におきまして安全教育ということが大切だと思うんです。また安全教育に伴って事故防止をするにはどうしたらよいかという問題はやはり健康管理、指導、これも大きな問題でないかと思うのであります。

統計上からみますと子供たちが非常に疲れている時にひどいケガをするのが多いようでありませう。一週の中でも週の中間と、日曜に遊び疲れた月曜に比較的多いんです。これらも家庭での疲れ、学校での疲れがここに現われて来るものと考えられます。そこでやはり健康管理の必要を痛切に感じております。

それから管理下にあっては、休憩時間中に多いんですね。やはりここに一つの問題があり、私どもが十分手を伸ばし遊び方についての指導をしていかなければならないのではないかと感じておる次第であります。

また蒲谷先生がおっしゃったように地域社会の団体とも手をつないで事故防止をしていかなければならないと考えているわけでありませう。

原島 どうもありがとうございます。

蒲谷 休憩中に事故が多いということは横浜市でもその通りで7月の例では医師にかかった災害は休憩中が91件、授業中が72件なんです。子供たちがとび回る時は災害が多いということ認識しなければいけないんじゃないでしょうか。

原島 それは男と女の子との違いにも現われていますが、

蒲谷 女の子の例は休憩中は39件、授業中は42件と反対にはなっていますが相当数の災害であるわけなんです。それから管理下の問題で授業前と放課後ということが非常に大きな問題になると思うんです。授業中の72件に対し始業前に

32件出ているわけで、授業前にも細心の注意を向けていかなければいけないんじゃないかということ。

それから多発している学校ではそれを止めようとしてもなかなか止まらないばかりか、非常に大きな災害も多い、このことは統計上から考えてみなければならぬと思うわけです。

しかも多発している学校の一つの理由に、体育の盛んな学校で、子供の健康を積極的に行っている学校に災害が多いという所に大きな問題があると思うんですが、その辺を一つお話し合い願いたいと思うんですが――

原島 大変重要なところだと思うんですが、今までお話願ったのは災害(ケガ)の理由だと思うんですが、それではケガを起す原因になるものは何であるかということですね。これは湯浅先生の方でも大分資料をお集めではないでしょうか。



原島先生

湯浅 それは問題は種々あると思うんです。いま横浜の例もありましたが文部省としては31年と32年と二ヵ年全国抜取調査をやったんですが、この対象は医師の治療を受けねばならないようなケガを対照としたんです。そこで白岩先生の方にも、蒲谷先生のお話とも関係があるんですがね、例えば小さいカスリキズの数と医療を受けるようなケガの問題もあるんですね。

原島 それとまた死の原因となることもね。

湯浅 ハアそこをいっしょくたに議論出来るかどうかという問題もあるんです。しかし私幸に学校管理下で医師の治療を受けなければならないような立場で調べた愛知県の統計が、白岩先生のお話に出ていた日曜日と週の中で現場の先生方が日ごろ疲れていると思っておられる日にケガが多いということで、疲れというものはバカにならない、しかし疲れているからケガをするという風に単純に考える方もありますが、それだけでなしに、安全に対する注意、十分なトレーニングができておらんとか、要するに疲労は根本的な原因というよりは起すときの動機になっているというようなことを考えなければならぬということですね。

原島 いくら疲労していても、ケガが起らぬように用意しておれば何も起らん。それでは、どこに用意を向けなければならぬかということになります。

湯浅 そうですね。その点今の学校では体育の時間に非常に多いわけですね。だから子供の活動と密着している。もう一つは刃物を使う図画工作の時間に相当あるんじゃないかと思うんです。その点みなさんの御経験はどうでしょうかね。

それから、そういう子供の活動と環境の条件とのぶつかりで来るんじゃないですかね。先程のお話のように、壁を塗り替えただけで減っているんですね。ということは原因としての環境ということを考えなければならぬんじゃないかろうか。その先のことはもう少しうがったところを先生方から聞いて

いただいたらと思うんですが……。

原島 中西先生どうぞ。

中西 先程お話がありました体育の盛んな学校に事故が多いということは、今湯浅先生からもおっしゃった学校生活のルールを体得させる、理解させる、これが非常に大事なことですよ。

本村小学校を建替えます時に私はこういう経験を持っているんです。子供が廊下を走るのがケガの原因なんですが、これを走らせないようにずい分苦労いたしました。その一つにこういうことがあるんです。国会図書館に子供を連れて行った時、あのジュータンを敷いた広い廊下を走れっていても子供たちはよお走らない。その子供というものの心理状態を考え、新しい学校の廊下を広さ2.7mのアスタイル張りにしたんです。こんな広い廊下はぜいたくだといわれたんですが、きれいに磨きあげたアスタイル張りの廊下に子供をおいた時、子供はよお走らない。それで施設というものをどのような状態においた時に子供はルールを破るかという、乱雑さ、汚さ、不潔さと暗さと不安定な校舎においた時なんです。

それから体育の指導ということも、非常に強いルールを要求しております。とかくリクレーション式な教材を持つ時には、子供に放らつきの自由を与える、これがやはりケガの原因を作るんです。体育をする時には、跳箱一つ跳ばすんでも、跳箱の安定度、マットの敷方まで細心の指導が行われていけば、どんなに強くやっても決してケガは起らないということ、ハッキリ認識しておるんです。

それから、体育の時に最も要求すべきことは巧緻性の問題で、これは物にあった時にそれに対処する修練が必要だということを実感しております。

体育の授業というものは、物事に対して適応していく強さを私要求して行って、ケガというものをなくして行っているわけなんです。

要は、ルールを徹底的に子供に吹きこんでいくのがいいんじゃないかと思うんです。

もう一つ家庭カリキュラムを作ったのです。一年生と六年生に要求するものの段階をハッキリこしらえて、家庭でつけてもらう手引をこしらえ、先程、蒲谷先生からお話が合ったように家庭の協力を得たというわけです。



白岩先生

原島 白岩先生どうですか。  
白岩 湯浅先生からケガの治療を要するものと要しないものとの問題が出ましたが、私どもの統計では、大体擦過症程度のもは年に千件位ございます。

原島 それは、何人についてですか。

白岩 私どもの学校では1083人の在籍でございます。

原島 大体一人に一回ですね。

白岩 そうです。それから医師の治療を要するものは、年に30件ございますが大抵医師の治療を受けるようなのは休憩時間中が多々ございますようです。授業時間では図画工作の時間で、これは、ナイフで切るとか糸ノコを使いました時とかです。先程のお話にも出ております安全教育とか事故防止の問題にまで細心の注意を払っておるつもりでございますが、なお注意すべき点がございますね。1日も早く児童傷害補償法の制定が望ましいですね。

休憩時の問題には運動場の問題があるのではないかと思いますのでございます。私のところでは在籍に応じて非常に狭いので、遊び場というのが少ないので、勢い駆けたり衝突したりで起るわけでございます。

中西 運動場が狭いということね。私の学校のことばかりということになります、子供が衝突して困る。それを防ぐためにこういう方法をとったんですよ。

千人の子供にね、朝礼の時間や遊びの時間にホークダンスをやらしたんですよ。千人の子供が、狭い場所で身のひるがえし方というものの動きを知るんです。混雑した場でパートナーを探して、すぐ手をとって遊ぶという和やかな空気が一つと、狭い場所で自分の所作を完遂する巧緻性を育成していくんですね。それで衝突が非常に少なくなる。それから大きい子が小さい子をパートナーとして遊ぶ観念を持たせまずと非常に大事にする。小さい子を突飛ばして遊ぶという態度がなくなるんですね。これはおもしろい考えだと思えますよ。

原島 時間が大分たちましたが最後に今のお話のつづめを湯浅先生にまとめてもらいたいんですが。



湯浅先生

湯浅 私かつて大都會の自動車の事故をしらべたことがあるんですが、東京のまん中よりは都会から野っ原へ出る境目に事故が起るんですよ。つまり運転手の緊張がホッと解けるところに起きるんですよ。

白岩先生のお話のように日曜日のあくる日は多いですね。単なる

疲れからくるのか、これは日曜と月曜のやり方とルールを変えなければならないね。そういう風にいうと、場に適應する、その場に対処するということに問題があるのではないでしょうか。

要するに、先生方は教室の中ではしつけをされるが、教室を出たとんに切り換える指導がどうなっているか。それから週の半ばでケガが多くなるというのは、慣れというのが一つあって適應に対する緊張がとけてくる。単なる疲れということだけではないのですね。その点はいかがですかね。

蒲谷 工作の例で申し上げますと、最初に取扱った時に一番事故が多いのです。だんだん少なくなって、ある程度までやった子供にまた特殊な大きな事故を起してしまうわけです。今の家庭は、一面安全教育が徹底したために、子供のエンピツ



蒲谷先生

一つ削るにも子供に持たせないで家庭で整理する。それが学校で急にナイフを使うとかいう時の差となるので、できるだけ危険度がないように、徐々に慣らしていく必要があると思うのです。

それから、郊外での事故ですが、私の家が郊外で、交通量は多くない場所であるのに大きな事故を起しているわけです。それが交通制限をされてから安全感が出て来たわけです。身に感ずる危険感が累積すると大きな事故が発生してくるというわけで、工作などの指導にも子供達に安全感を持たせるような指導順序が確かに必要だと感じられるのであります。

白岩 本当に工作の時間など、彫刻刀の使い方など安全な指導が必要ですね。

湯浅 いろいろお話もありましょうが、原島先生の御要請でつづめをさせていただきます。

今日のお話から完全な結論を得るということは非常にむづかしいと思うのであります。昭和27年に松島で、市川第二中学の子供が修学旅行で赤痢になって死んだことは、世界的にもめずらしい例ということになっているんですが、それ以来相模湖事件で麻布中学の子供が22人死んだ。紫雲丸事件と相次ぎまして、その昭和27年あたりをスタートにして、ようやく日本の安全教育の目が開けて来た。従ってこの安全教育、あるいは傷害の防止、不慮の事故災害の防止ということは、日本の教育界としては今後の問題だと思っておるわけです。

ところが一方に放っておけない現実には、毎日子供たちがケガをする。先程もお話がありましたように、大体一人の子供が1年1回の割合でケガをする。そうすると2千万というケガの実数が考えられる。この現実には安全教育の研究をせにゃならんということが一つ、もう一つは、現に今日明日とケガをしている子供に対する対策を立てていかなければならない。この二つをとりあえず考えなくてはならない。

幸に、昨年以來傷害補償の問題で、日本の教育界あるいは全国のPTAの会合等から強い要望が出まして盛んな論が起っている。今大体全国の16県で安全会といのができて、一方では安全教育の啓蒙指導をやり、一方ではケガをした児童に見舞金をやるというような活動を続けているし、文部省では今度の通常国会において、子供の傷害補償について特別な制度並に予算措置をお願いするというようなことになっておるわけなんです。

今晚の話の中心は安全教育であります。産業安全に対する学校の安全というのは、安全な行動をすることができる子供をつくる。ということだと思っております。

そこで、今晚出ましたいろいろな話を総合しまして、先ず安全な行動というのは、非常に能



# 寿にして康

東京大学名誉教授  
老人病 研究所長

緒方知三郎

きょうあなたに伺いたいのは、健康第一若返法と長寿法だよ。この範囲のお話を願いたいと思うのだがね……  
本社顧問小池博士の質問に来年は喜寿ですとおっしゃるお歳とは思えぬほどの若々しさでお話くださる。

私のやっている老人病研究所では、学問的な立場から、老年性変化という老人に（40歳時代から）徐々に現われてくる変化そのものが、どういうふうにできてるか、どんなものか、それに対処してどうすれば老化現象を遅くすることができるか——つまり、老化現象の進行を押えることによって、ある意味では年令の割合に老人を若返らせる——そういう目的で老年性変化の研究をしているんです。

私は病理学者だから、病理学の立場から、動物を実験材料として研究をしているが、大体の見透しが立ったわけです。

今まで人体についてやって来た唾液腺ホルモン、それから動物実験で唾液腺の内分泌の研究が、老年性変化をある程度防止できるということが証明されて来たわけです。

自然死というのは、老年性変化がだんだん強く現われて来て、すべての臓器の機能が悪くなって、火が消えるように天寿を全うすることである。大部分はそこまで行かないうちに病死するので、その治療の方法が研究されているが、老年性変化がもとになって、いろいろな病気がつけ加わって老人病という形に進行するわけで、老人病は慢性なんです。初めは老人性変化が根本だから、これを防ぐことができれば、老人病もある程度予防することができます。

老人に多い脳溢血も、老年性変化がもとになって血管の変化が起るからで、これに対処できればよいわけです。

その老年性変化は唾液腺ホルモンの補給によって遅くされる。つまりいつまでも老人を若々しい状態に保てるという明るい見透しを持っているわけです。

私自身にも唾液腺ホルモンをやっているが、これで健康を保持しています。

いくら寿命が延びても弱々しい者が多くなれば人間社会に不幸なことです。

人間には天寿というものがあるって、どんなに健康に注意しても長生きはできない。われわれはいつ死ぬか知らないで生きているが——人間に与えられた天寿を全うするために、老年性変化すなわち

骨が脆くなる。

歯が抜ける。

皮膚にしわがよる。

動脈が伸びて拡張してくる。

目や耳が遠くなる——ような、すべての変化を克服することができたらということで、研究所を作ってもらってやっているわけで、こうした研究をさせてもらっていることをありがたいことだと思っているわけです。

老人には頑固な人が多いが、“今からでも遅くはない”ということば通り、自分のからだに注意を払って医師のすすめに従うべきでしょうね。

唾液の出ない子供は短肢症（小人）となるが、それに唾液腺ホルモンの注射をすると大きくなる。このように大切な唾液が、排泄管の中を流れている間に血液の中に吸収される器官があるが、その吸収作用が悪くなり、そのために老人性変化を起す。従って唾液腺ホルモンの注射をすれば、老人性変化も癒り、声のシワガレも若返る。声楽家などはこれを使うとよくなるし、最近ゴルフが盛んになってきたが、これを注射すると、筋肉・関節・脊骨の堅さなども組織機能を高めるので、遠くまで飛ぶようになるというわけでよく使われているようである。

お話は佳境に入ってつきないが、二十歳台の娘さんのような若々しい奥様のお声を後においとしました。（文責 大倉）

# 保 健 体 育 一 如 の 姿

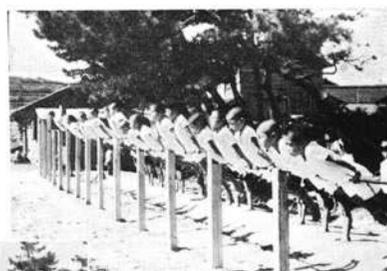
## 鳥 取 県 気 高 郡 青 谷 小 学 校

本年度の努力目標として、健康教育（体育）が学校経営の第一に置かれていること、この学校が今日をなしたことには、成るの日に成るにあらずのことば通りであることは、

### 本校体育の沿革

本校は、体育運動方面については、すでに明治以来輝かしい歴史を有し云々  
（青谷体育概要による）  
 この前書きで明かであると共に、それが空文でないことは、最近における足跡として

- 昭和 24 年度 県教育委員会指定体育実験学校
- ◇ 25 年度 同
- ◇ 26 年度 県教育委員会並びに全国体育指導者連盟指定体育実験学校
- ◇ 30 年度 県教育委員会（体育保健課）並びに県小学校体育指導者連盟後援による発表会
- ◇ 13 年度 体位優良学校（鳥取県・文部省）
- ◇ 25 年度 健康優良学校（県教育委員会）
- ◇ 26 年度 同上
- ◇ 27 年度 同上
- 保健体育優良学校（日本体育指導者連盟文部省）
- ◇ 28 年度 健康優良学校（県教育委員会）
- ◇ 29 年度 同上
- ◇ 32 年度 結核予防対策優秀校（県知事）



四年 鉄障



二年 リズム運動

本校児童の身体器能測定と吉田章信氏の標準との比較 （昭 33. 1 測定）

種 目	学 年	性 別	平 均	4 年		5 年		6 年	
				男	女	男	女	男	女
				本校		吉田		吉田	
肺 活 量	本校	♀	1.875	1.771	2.100	1.929	2.546	2.236	
	吉田	標	1.688	1.484	1.810	1.568	1.990	1.811	
背 筋 力	本校	♀	56.92	42.85	58.61	47.00	67.08	56.89	
	吉田	標	54.00	45.00	60.00	49.00	68.00	53.00	
握 力	本校	♀ 右	14.28	12.31	16.07	13.45	19.63	16.63	
	吉田	♀ 左	12.85	12.15	14.27	12.67	19.00	16.25	
	吉田	標	16.8	14.3	18.4	16.5	20.8	18.9	

結果、肺活量は標準以上であるが、背筋力、握力は標準以下である

結 核 児童の疾病状況 結核予防は年3回実施しているが、ここには全員を対象とした統計をのせる(4.9.1月の3回)

検査年月	20	21	22	23	25	26	26	27	28	29	29	30	31	32	32	33	33
陽 転 %	10	5	4	6	4	4	11	4	4	4	9	4	9	4	9	4	9
陽 転 者 %	20.7	20.8	48.9	37.7	22.8	41.0	47.8	33.8	45.8	41.3	46.5	61.9	30.6	54.7	53.3	61.2	
発病者 実人員	0	4	1	3	1	2	0	1	2	3	0	2	2	3	3	4	

△印は、BCG接種 発病者実人員は、B2 C2 のものだけ

寄 生 虫 （部落別統計）

検査年月	部落	長和	瀬夏	油井	手前	町灘	町浜	町駅	町前	町西	町中	町東	町赤	町尾
25. 12		80.0	81.0	85.0	84.0	80.0	80.0	70.7	70.0	80.0	82.0	81.0	95.0	
27. 9		70.0	75.0	53.0	64.0	62.0	63.0	63.0	50.0	67.0	58.0	71.0	77.0	
29. 10		76.0	73.0	60.0	67.0	60.0	54.0	47.0	52.0	70.0	55.0	60.0	50.0	
31. 6		60.5	82.5	41.0	51.6	48.0	45.8	47.3	33.3	64.8	34.9	45.7	53.8	
33. 6		22.1	58.1	33.3	27.9	21.5	17.2	23.7	16.6	31.8	18.1	20.4	28.5	

が、実証している。

七項目にわたる経営方針の中で、体育に科学的根拠を与える。児童の発育段階を重視して、生活の拡張をはかる。

というねらいは、指導方針の中によく盛られている。

養護の尾崎恵美子先生は

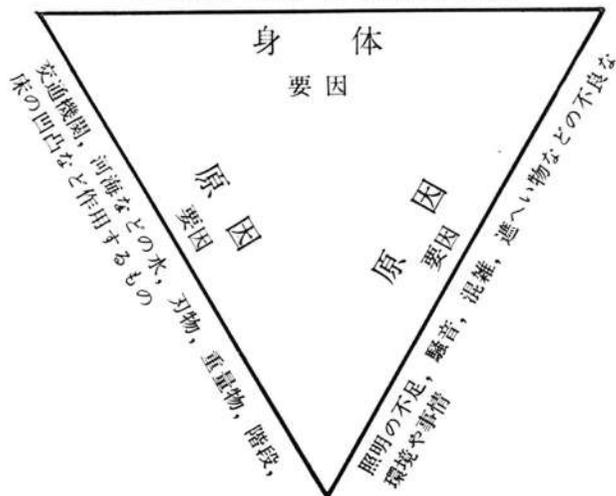
体育の先生に、十分な御理解があり、それこそ文字通り全校一致で私たちの仕事にも協力して下さるので……

と、いかにも満足そうに語っておられた。

こうした歴史と、現在から生まれた青谷体育概要に載録されている諸統計から二三を転記して参考に供し、資料を提供して下さった尾崎先生へ謝意を表します。

## 災害発生の要因三角形

運動障害、疲労、不注意等心身の異常



災害が発生するには、それを作る身体要因と原因要因と環境要因との3要因が同時に存在しなければならない。換言すれば、3要因が同時に存在しないように努めるのが災害予防の中心点である。3要因を別々に減らすのが災害予防の実際である。読者はこれらの3要因の内容について考えてみていただきたい。

慶大医学部教授 原島 進案

※ 5 ページからつづく

率のない行為の仕方だと思つて、そのしつけであります。また、その場に適應して安全な行動を切換えていくという指導がどうなされるかということです。

とにかく日本の安全教育というものは歴史が浅い。従つて今晚の会合は非常に貴重な会合を開いていただいたわけで、日本の小中学校の先生方は安全教育については白紙に近い経験だとの自覚に立ってお互に研究していくと、今晚の会合がそれに対する一つの口火になれば結構だというふうに考えるのです。

非常にまとまらないことですが――。

原島 どうもありがとうございました。

非常に貴重な資料を提供していただきましてどうもありがとうございました。ではこれくらいで――。

閉会のあとのお話の中から左のような貴重な御発表がありましたので御参考までに掲載いたしました。



カワイ

### カワイ肝油ドロッア1号

1粒中 { A 3,000 国際単位  
D 300 国際単位

### カワイ綜合肝油ドロッア号

1粒中 { A 3,000 国際単位  
D 300 国際単位  
B<sub>1</sub> 1 珎  
B<sub>2</sub> 0.4 珎  
ニコチン酸アミド 2 珎  
ビタミンC 10 珎  
第二燐カル 200 珎

### カワイカルシウム錠

3 錠中 沈降炭酸カルシウム 1 瓦

### カワイ駆虫錠

1 錠中 { サントニン 0.02 瓦  
精製海人草エキス 0.1 瓦

水溶性ビタミンA・D

給食強化剤

### アドリッチ

1 瓦中 { A 50,000 国際単位  
D 5,000 国際単位

製造 河合製薬株式会社

東京都中野区野方町2丁目1,171番地

電話 中野(38)0443~5